

## 公共図書館による「地域の知」の継承の可能性 —地域資料サービスを中心とした考察—

湯本 寛深

日本学術会議地域研究委員会によると、「地域の知」とは、「地域の状況や人々の暮らし方などに関する地域に関わる情報、知識、そして知恵」である。「地域の知」は、当該地域の行政組織や研究機関、また地域住民が様々な形で持っているものであり、公共図書館の収集する地域資料も「地域の知」の形の一つであるといえる。「地域の知」は、地域の重要な財産であるにもかかわらず、地域内で共有化されていないことが指摘されており、有効的な活用結びつかないのはもちろん、失われ、将来に継承されない可能性がある。こうした現状を踏まえ、公共図書館における「地域の知」の継承の可能性について、地域資料サービスを中心に考察することを本研究の目的とする。また目的に基づいて、研究課題 1 に「地域の知」の形の一つである地域資料に対する公共図書館の理解の変遷を明らかにすること、研究課題 2 に公共図書館における「地域の知」の収集・提供の実態を明らかにすることの二つの研究課題を設定した。

調査方法は文献調査と訪問調査である。文献調査では、先行研究の地域資料に関連する雑誌論文リストを参考に調査するとともに、図書館情報学に関する事典やハンドブックなどの参考図書を調査し、地域に関する資料の理解とその変化を明らかにした。文献調査から、1960年代以降「郷土資料」の理解が変化したこと、また同時期に「地域資料」という用語が登場し、現在ではどちらの用語も同じ意味で用いられていることが明らかになった。

あわせて文献調査によって、実際に公共図書館で取り組まれている地域資料サービスを抽出し、訪問調査の対象とする公共図書館を選定した。訪問調査では、愛荘町立愛知川図書館の町のこしカード・町のこしマップと日野市立日野図書館の日野宿発見隊の活動の活動を対象として図書館員に半構造化インタビューを行い、「地域の知」の提供の実態を明らかにした。調査の結果、近年の公共図書館は、地域資料の閲覧によって「地域の知」を利用者に提供しているだけにとどまらず、様々な図書館事業を通じて、地域住民が普段の生活の中では当たり前のこととして意識していない「地域の知」を地域住民に意識させるきっかけをも提供しているということが明らかになった。

公共図書館の取り組みが「地域の知」を意識させるきっかけを提供することは、地域住民が「地域の知」を知識として蓄積することを促すと考えられる。地域住民が「地域の知」を知識としてもつことで、地域住民が知識として蓄積する「地域の知」を次の世代へ継承する可能性が生まれる。すなわち、近年の公共図書館の取り組みは、公共図書館が地域資料として蓄積する「地域の知」を次の世代へ継承する可能性とあわせて、二つのプロセスによる次の世代へ「地域の知」の継承に貢献しうると考えられる。

(指導教員 白井哲哉)